

正倉院文書の性格とその特質

Characteristics and Traits of Shoso-in Documents

YAMASHITA Yumi

山下有美

はじめに—正倉院文書とは—

正倉院文書とは、東大寺の正倉院に伝来した古文書である。これは大きく2つの古文書群に分けられる。1つは、正倉に収納された宝物や法会関係器物に関連して伝来した「北倉文書」で、もう1つは、造東大寺司の写経所（皇后宮職系統の写経所）に関する「中倉文書」である。量的には後者が9割以上を占め、正確な点数を数えることはできないが、約1万点と⁽¹⁾言われている。ここで私が紹介するのは正倉院文書の中心をなす後者で、その内容から「写経所文書」と呼ぶこととする。

写経所文書は、皇后宮職系統の写経所で用いられ、保管され、蓄積された古文書群である。これが、いつごろ、どのような経緯で正倉院の中倉に入ったかは不明だが、少なくとも江戸後期には正倉院の中倉に存在しており、古代の古文書群として着目されていた。その後、数度の「整理」を経て現在にいたるが、その過程で正倉院の外へ流出した古文書も少なくない。これも本来の性格上、写経所文書の一部として扱う必要がある。

以下、写経所文書を形成した写経機構について、写経所文書の内容について、日本古代史研究における写経所文書の史的価値について順に述べていく。

1. 写経所文書を形成した写経機構

写経所文書は、皇后宮職系統の写経所で形成された古文書群であることはすでに述べた。この皇后宮職系統の写経所というのは、国分寺や東大寺大仏の建立を命じた聖武天皇の皇后である光明皇后にかかわる写経機構のことである。そして、この写経機構は、数度にわたり、複雑に変遷しつつ、大規模な写経事業を次々とこなす国家的な写経所として機能したのである⁽²⁾（図1参照）。

光明皇后は、皇后になる以前から写経を発願し、はじめはその家政機関である光明子家で写経事業をおこなっていた。確認できる最も早いものは神亀4年（727）の史料で、光明皇后と聖武天皇の子（皇太子）の安産祈願と、夭折したその子の菩提を弔う目的で行われた2度の大般若経の写経事業に関する史料である⁽³⁾。

天平元年（729）、光明子の立後に伴い皇后宮職が設置され、写経所も皇后宮職管下の写経所として引き継がれる。この写経所で天平5年（733）ごろ、五月一日経の写経事業がすでに始められていた⁽⁴⁾。天平9年には同じ皇后宮職下に「経師所」という写経機構もあり、これと写経所の2つが天

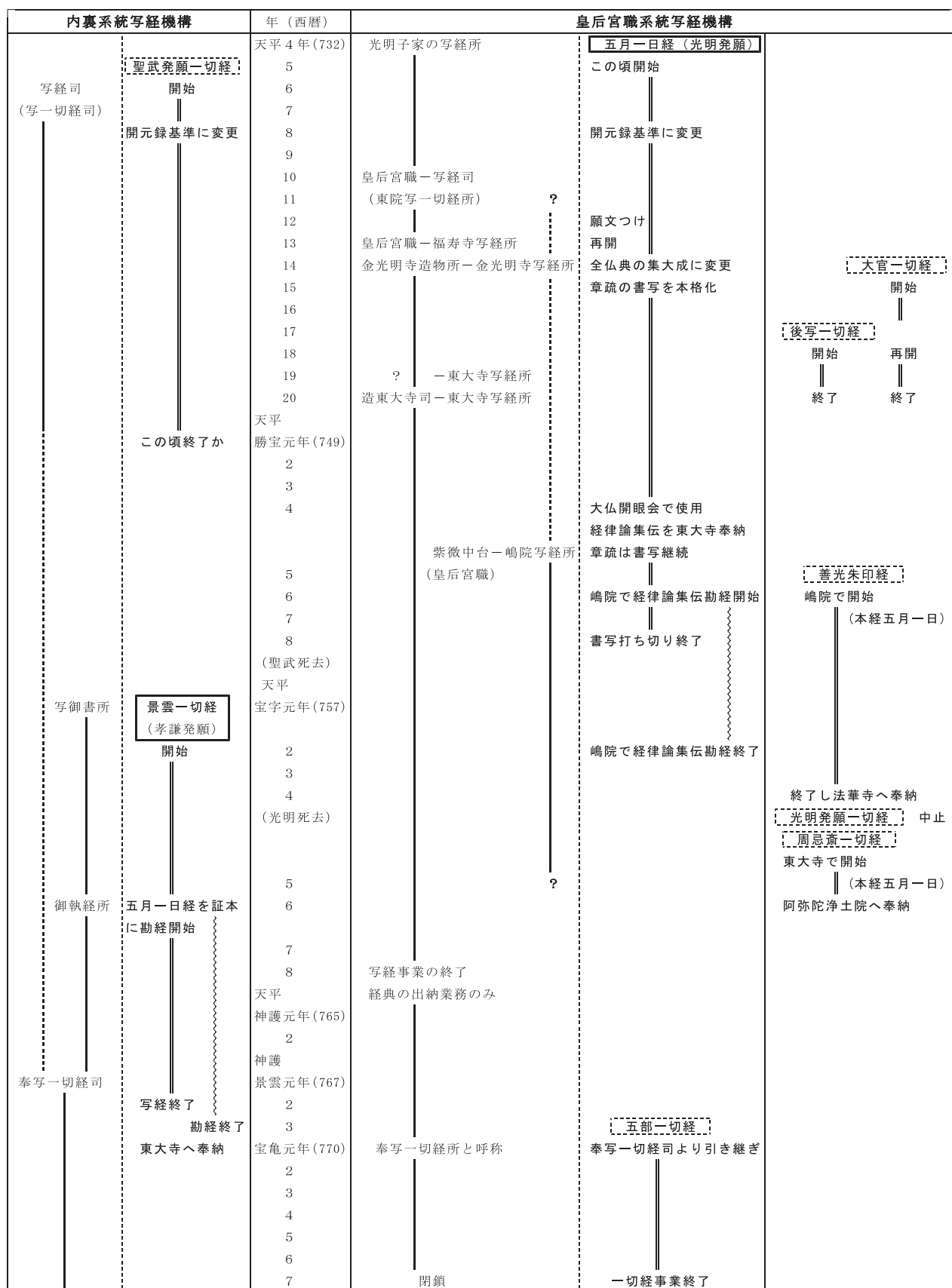


図1 国家的写経機構と一切経の系統図

平10年3月ごろ、「写経司」として整備される。さらに天平11年には、写経司の下に、五月一日経を専門に写経する「東院写一切経所」が設置されるが、天平12年(740)4月に書写が中断され、天平12年5月1日の日付をもつ願文が着けられた。それゆえこの一切経を五月一日経と呼ぶ。

五月一日経については後に詳述するが、この皇后宮職系統の写経所とは切っても切れない密接な関係にある一切経である。願文を着けたものの、五月一日経はここで完成したのではなかった。その後天平13年には、光明皇后の発願寺と思われる福寿寺(のちの東大寺域内)に場所を移し、「福寿寺写経所」で一切経写経事業は継続された。天平14年5月ごろ、福寿寺が金光明寺に吸収されたのにもない、「福寿寺写経所」も「金光明寺写経所」となった。金光明寺とは大和国国分寺であり、その造営機構は皇后宮職と密接な関係を持ち続ける。

天平17年、大仏を金光明寺内に造立することが決定した。さらに天平19年冬には、金光明寺は東大寺と寺名を変え、それによって、「金光明寺写経所」も「東大寺写経所」となった。少し遅れて天平20年7月ごろ、東大寺の造営機構である「造東大寺司」が成立し、「東大寺写経所」は造東大寺司の所管となった。

五月一日経はこの「東大寺写経所」でも写経事業を継続し、天平勝宝4年(752)の大仏開眼会で開眼供養の一切経転読講説に用いられた。その後、五月一日経の経律論集伝部が東大寺に奉納された。残る章疏部については引き続き写経事業が続けられ、最終的には天平勝宝8歳(756)の聖武天皇の死を契機に打ち切られた。総巻数は6500巻とも7000巻ともいわれる⁽⁵⁾。

五月一日経の事業期間中、その写経を「常写」「常疏」と呼び、写経所では常におこなう写経と位置づけられていたが、それに対し、その時々が発願される写経を「間写」と呼んでいた。この写経所では200を優に越える「間写」がおこなわれた。同じ經典を1度に何千巻も写経する大規模なもの、色紙を使ったものなど、その存在形態はまことに多種多様である⁽⁶⁾。

五月一日経の終わった後の「東大寺写経所」では、その後もさかんに、光明皇太后とその子孝謙天皇が発願した写経を中心に、天平宝字8年(764)まで写経事業がおこなわれた。翌天平神護元年(765)からは、写経事業はおこなわれず、經典の出納業務のみをおこなうようになる。

だが、再び神護景雲4年(770)から急に、新たに五部の一切経の写経を担当する⁽⁷⁾。これは、内裏系統の写経機構である奉写一切経司から引き継いだ写経事業である。これが終了するのが宝亀7年(776)で、写経所文書もこの五部一切経の写経事業とともに途絶えており、そのことから「東大寺写経所」の活動が宝亀7年をもって終了したと考えられている。

以上、光明子家にはじまり造東大寺司管下の「東大寺写経所」にいたる皇后宮職系統の写経機構の変遷をみてきた。内裏系統の写経機構⁽⁸⁾との比較ができる図(図1)を付したので参照していただきたい。皇后宮職系統の写経機構は、光明皇后の発願経を中心とした国家的な写経事業を、約半世紀にわたって、担い続けてきた。この写経所を奈良時代の国家的写経機構の一翼とみなすと、もう一方の極には内裏系統の写経機構が存在した。ここでもやはり、聖武天皇や孝謙天皇の発願経を中心とした重要な写経事業を担っていた。奈良時代の国家的な写経事業は、この2系統の写経機構が担っていたのである。

2. 写経所文書の内容について

(1) 写経所の仕事と文書・帳簿

では、写経所文書とは具体的にどのようなものなのかを次に見ていきたい。一言でいえば、写経事業を進めるにあたって、写経所の事務局で作成・授受された文書や事務用帳簿である。これらを管理保管したのは、写経所事務局の案主である。案主は官司機構の文書行政の末端に位置する下級官人で、文書や帳簿を実際⁽⁹⁾に書き、帳簿を使って写経の進行状況や物資の出納などを照合・記録し、そうした文書や帳簿自体を整理・保存した。六国史や律令には出てこないが、文書を要とした律令制では重要な役割を担っていたのである。また案主ではないが、案主を補佐し、雑用を請け負う者も写経所文書には多数登場し、彼らが帳簿に記録することもあった。

写経所を所管する官司、たとえば造東大寺司であれば、造東大寺司の次官・判官・主典・史生のうちから少なくとも1人は写経所の担当と決められていたようである。その担当者は、写経所の案主が書いた文書に目を通して署名するだけでなく、写経所の事務局にも頻繁に滞在し、案主とともに実務をこなし⁽⁹⁾た。

天平宝字2年(758)に、造東大寺司は、所管の各所(写経所以外には、造物所・造瓦所・造大殿所・造仏所など多数の所があった)に別当という担当官を1, 2名配置する別当制を導入した。写経所の別当は安都雄足1名で、彼は造東大寺司の主典である。別当を各所に配置したことで、物資・銭の出納などの財務関係の業務が各所内でまかなえるようになり、事業の円滑化が図られた。それにとともに、写経所文書の内容も変化した。

このように、写経所文書は多種多様で、時期によっても種類や書式が異なる。すべてを網羅することはできないが、主な文書と帳簿を一覧したのが表1である。表1には時期による残存状況の違いも合わせて示してある。

具体的に写経という作業手順、写経所内での人や物の動きなどに即して、どのような文書や帳簿が作成・管理されたかを簡単に紹介しておく⁽¹⁰⁾。

写経は、①装潢による造紙(経典用の紙を貼り継ぎ、槌で打って表面をなめらかにし、界線を引く作業)→②経師による書写(本経を見て書く)→③校生による校経(本経と付き合わせて通常は2度校正する)→④装潢による装書(経典用の紙の端をきれいに切り、表紙を着け、軸と緒を着けて、きれいに装丁する作業。この段階で防虫のために黄檗染めをすることもある)と、おおまかにこの手順でおこなわれ⁽¹¹⁾る。経師・校生・装潢を合わせて写経生と呼ぶ。彼らに必要な物資を充当し、作業の進行を管理するのは、事務局にいる案主の仕事である。

案主は、①で「充装潢帳」(個々の装潢に紙等を割り当て、できあがった卷子を受け取った時の記録)、②で「充本帳」・「充紙筆墨帳」(個々の経師に経典の本経・紙・筆・墨を充当した記録、できあがった新写経典を受け取る時には、余った紙や破れた紙の枚数も記録)、③で「校帳」(個々の校生に経典を割り当てた時の記録)、④で再度「充装潢帳」(個々の装潢に経典の装書を割り当てた時の記録)を作成し記録する。寺や僧等から借りる本経の出納業務や、できあがった新写経典の奉納は、「奉請文」を作ってやりとりし、受け取った文書は継文にして保管する。

文書を書くのは案主だけではない。写経生は、自分の作業量を巻数・用紙数で計算して事務局に

表1 写経所文書の種類とその変遷 (出典: 拙著『正倉院文書と写経所の研究』370 頁)

区 分	作 業	文書・帳簿	I	II	III	IV	V	VI	VII
(1)生産管理	造紙(継打界)	充装潢帳	○	○	○	○			
	書写	充本張	○	○	○	○		○	
		充紙筆墨張	○	○	○	○		○	
		筆・墨手実						○	
	校正	校張	○	○	○	○			
(2)労務管理	装丁(端切・着軸)	充装潢帳	○	○	○	○			
	点検	勘定帳・検定張	○	○	○	○		○	
	作業量把握	手実	○	○	○			○	
	労働時間	上日張(年ごと)			○				
		上日解(案)	○	○	○	△			△
(3)財務管理	休暇	請暇不参解				○		○	
	報酬	布施申請解(案)	○	○	○	○		○	
	雇用	召喚状	○	○	○	○		○	
		貢進文	○	○	○	○		○	
	その他	月借錢解						○	
	予算	用度申請解(案)	○	○	○	△		○	△
	決算	月残報告(解案)	○	○	○	△		○	△
	雑物の調達・運用	雑物の申請解(案)	○	○	○	△		○	△
	(紙・筆・墨・浄衣他)	雑物充当の符			○				△
		雑物納張	○	○	○	○		○	○
		雑物用張	○	○	○	○		○	○
	銭の調達・運用	銭の申請解(案)				△		○	△
		銭納張				○		○	○
		銭用張				○		○	○
	食物の調達・運用	食物の申請解(案)	○			△		○	△
		食物納張				○		○	○
		食物用張				○		○	○
(4)情報管理	經典(本経・新写)	經典納返張・櫃記	○	○	○			○	
	の出納	奉請状	○	○	○	○	○	○	
	事業報告	告朔解(案)	○	○	○	○		○	○
		写経報告(解案)							
		行事手実						○	
	事務連絡	指示や消息の書状				○			○
	文書発信記録	解移牒案				○		(○)	○

(注) ●△は解移牒案で確認できるもの。

- I = 皇后宮職写経司 天平10～12年, II = 金光明寺写経所 天平14～19年, III = 東大寺写経所(1) 天平20～勝宝期, IV = 東大寺写経所(2) 宝字年間, V = 東大寺写経所(3) 天平神護～神護景雲3年, VI = 東大寺写経所(4) 神護景雲4年～宝龜7年, VII = 造石山寺所 宝字6年。

申告する「手実」を提出する。案主は提出された「手実」を、現物と帳簿で照合して、継文にして保存する。手実のデータをもとに「布施申請解案」を作成して、布施(多くは調布や銭)を上級官司に申請し、施主が出す布施を各写経生に支給する。

写経生は写経従事期間は、写経所で食事をし宿泊する。作業中に着る浄衣も支給される。これらの食料や、紙・筆・墨などの写経用品、そして浄衣類、その他生活にかかる物資や銭の「申請解」(上

級官司への申請文書)・「収納帳」・「用帳(下帳)」(物資・銭の出納記録)は事務局で作られて、管理された。宝亀期には「日毎食口案」といって、1日ごとに食料の使用状況を記録したものが残っている。

各写経生は写経終了後、紙・筆・墨・浄衣などをすべて事務局に返却する。写経が完成した後、事務局で収納物資・銭等の「用残文」とよぶ決算報告が作られ、上級官司に提出する。それとは別に、写経所はその上級官司に月ごとの作業報告である「告朔解」を提出した。

特筆すべきは、天平宝字期に特徴的な「解移牒(符)案」である。日付順に発行文書を逐一書き記したもので、内容によっては部分的に省略して記したものもあるし、実際に発行した文書の下書きのようなものもある。

そのほか、別当・案主らが現場にいないときに、指示や消息などを記した「書状」や、写経所に写経を命ずる宣を伝えた書状なども残存している。

写経生は一定の作業を終え、仕事が一区切りすると、休暇をとることができた。また、病気・親族の不幸・祭祀その他の理由で、やむを得ず休まねばならない時には、「請暇不参解」を写経所に提出して休みをとる。それから宝亀期に顕著なものとしては、写経生が写経所から借錢をする際に書いた「月借錢解」が多数残存している。

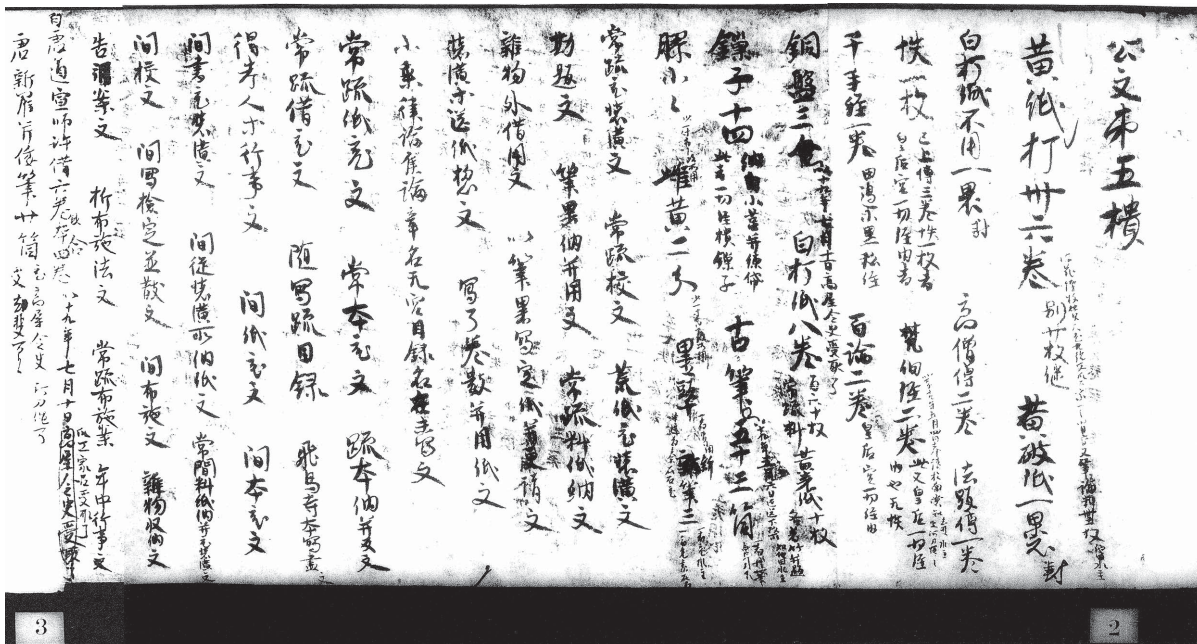
写経生の多くは、他官司から出向してきた下級官人である。官司所属の舎人や散位など、実際の職務は繁忙ではなく、官人としてプールされている状態の者や、官人身分ではない者も多く含まれていた。出向官人の写経所での出勤状況は「上日帳」に記録され、月ごとに所属官司に報告された。大規模な写経を迅速に仕上げなければならないような写経事業の場合には、写経生を集めるために「召文」がつくられた。

また、写経生になるということは、官人として出世するための入り口の1つであったので、主に一族の者を写経生として推薦する「貢進文」なども残っている。貢進された者は、經典の一部分を写させて正確さや美しさを試す「試字」によって採用が決定した。

さらに、写経所には、食事の準備(「料理供養」という)や浄衣の縫製など、写経生の世話をする者も一緒に生活している。仕丁や雇夫・雇女・優婆塞・優婆夷などがこれらの仕事に従事した。さらに、外部機関と經典や物資、文書の授受をする雑使も多数いる。

以上、ごく簡単に写経所文書にはどのようなものがあるのか、写経所とはどんなところかを大急ぎで見てきた。案主を中心とした文書行政の煩雑さ、業務の膨大さには、驚かされる。案主の勤務日数は、「上日」(午前)・「夕」(午後)とも29日・30日で、1ヶ月のうちほとんど休みをとっていない。過酷ともいえる勤務実態の所産が写経所文書であるといっても過言ではない。

ここにあげた史料は、天平19年(747)ごろの史料で、「公文第五櫃」(『大日本古文書(編年)』9巻345~346頁、続々修12ノ4第2・3紙)と名付けられた「櫃記」である。櫃に収納された多種多様の文書・帳簿を列記した部分である。「常疏充裝潢文」からはじまり、「年中行事文」まで31種類の帳簿類が記されている。ある程度のマニュアルはあったろうが、同じ目的で作られた帳簿でも、形式や書き方は多様である。継文という一般的な方法に対して、穴を開けてこよりで綴じた横帳もあるし、インデックスを貼り付けて工夫をこらしたものもある。その時々必要に応じて、どのような帳簿をつくるか、どういう形態が適切かは、ある程度、先輩の案主たちの経験に学びな



公文第五横 （紙綴目）
法花經 收養分充九張 受爪工家万呂四月六日又藤論料冊五枚 他田水主

黃紙打卅六卷 別廿枚綴 黃破紙一裹封

白打紙不用一裹封 高僧傳二卷 法顯傳一卷

帙一枚 已上傳三卷帙一枚者 以天平十九年五月四日奉請於南堂知志斐水主

千手經一卷 田邊小黒私經 百論二卷 皇后宮一切經內

銅盤三合 白打紙八卷 常疏料 黃表紙 各廿枚并題

鑲子十四 此者一切經鑲子 以十九年五月六日返送下政所 知他田水主

墨頭十 少一寸者下政所用 少一寸者下政所用 以十九年五月六日返送下政所 知他田水主

常疏充裝潢文 常疏校文 荒紙充裝潢文

勘題文 筆墨納并用文 常疏料紙納文

雜物外借用文 以筆墨寫定紙并更請文

裝潢等送紙惣文 寫了卷數并用紙文

小乘律論集論章名无官目錄名在未寫文

常疏紙充文 常本充文 疏本納并反文

常疏借充文 隨寫疏目錄 飛鳥寺本寫盡文

得考人等行事文 間紙充文 間本充文

間書充裝潢文 間從裝潢所納紙文 常間料紙納并充裝潢文

間校文 間寫檢定並散文 間布施文 雜物收納文

告朔案文 折布施法文 常疏布施案 年中行事文

自唐道宣師許借六卷本四卷以十九年七月十日 爪工家万呂受取了

唐新羅并倭筆廿箇 （同）充高屋令史 阿万羅万呂

史料 「常疏写納并櫃乗次第帳」のなかの「公文第五櫃」と題した「櫃記」

（出典：上は正倉院文書続々修12帙4巻第2・3紙より，下は『大日本古文書（編年）』9巻345～346頁）

がら、よりよいスタイルを作り上げていく創意工夫は、案主ら事務担当者の腕の見せどころだったにちがいない。

(2) 造石山寺所関係文書について

実は、写経所文書の中に、天平宝字5年(761)から翌年にかけて、石山寺の増改築工事を担った「造石山寺所」の文書群が含まれている⁽¹²⁾。これは、事務担当者が造石山寺所と東大寺写経所の双方を兼ねていたことによると考えられている。石山寺は聖武天皇の発願寺で、近江国保良宮の近く建てられた。工事終了後、案主が造石山寺所の事務帳簿・文書を奈良東大寺の写経所に持ち帰り、写経所で残務整理をしたことから、両者は混ざりあったと考えられる。

この時の事務担当者は、別当の安都雄足と、その下で働いた上馬養と下道主であった。この3名のうち、特に上馬養は、この後の東大寺写経所の休業中だけでなく、宝亀7年(776)の閉所までずっと写経所案主であった。写経所文書の形成に大きな影響を与えた人物であるといえる。

造石山寺所文書の内容は、主に寺の建築工事に関わるものなので、材木の調達・水運を用いた運搬、写経生とはちがう様々な工人や雇用された労働者の実態等、史料数は少ないものの、写経所文書の内容に比べて多様な広がりをもっている。そういった意味で貴重な史料群であり、早くから建築史研究者の注目するところとなった。

(3) 紙背文書(一次文書)について

写経所文書も、造石山寺所文書も、一度使われて廃棄処分となった文書の裏面を二次的に利用したものが多数ある。廃棄された文書を一次文書と便宜上呼んでいる。一次文書には、写経所や寺の造営過程で不用となったものが多いが、それらとは全く関係のないものが含まれている点で貴重である。戸籍・計帳・正税帳などのいわゆる公文類は、こうした一次文書として偶然に残った史料の断片であり、古代史研究者たちはまずこれらの公文類に着目した。また、具注暦や令内官司の大糧申請文などもこの類に入る。さらに興福寺や法華寺の造営関係文書もあり、光明皇后の家政機関、皇后宮職関係において、二次的に利用されて残ったものと思われる。

以上、おおまかにどのような文書・帳簿があるかをみてきたが、一次文書と二次利用の⁽¹³⁾関係に注目して整理した吉田孝作成の表(表2)を提示しておく。

3. 写経所文書の史料価値

では最後に、この写経所文書がもつ、日本古代史研究上の意味について述べることにする。それにはまず、五月一日経という一切経の写経事業の意義について、踏み込んで見ていく必要がある。写経所文書の性格が一層明確になるからである。⁽¹⁴⁾

五月一日経は、天平初年の事業発足当時は、当時、日本にあった一切経ワンセットのコピーをつくらうとするものだった。だが、天平8年(736)に玄昉が、中国最新の開元釈教録(730年成立)を日本に持ち帰ると、その入蔵録(開元釈教録巻19・20)に基づいた大乘小乗の経・律・論と賢聖集伝からなる一切経5048巻をそろえようという方針に変更した。しかし、入蔵録にある經典のテキストが当時の日本にすべてあるわけではなかったため、この方針はまもなく挫折した。天平

表2 正倉院文書の構成(出典:吉田孝「律令時代の交易」初出1965年,同『律令国家と古代の社会』岩波書店1983年)

〔表 文 書 〕	〔裏文書・反故文書〕
<p>〔甲〕収納器物に関連して残存した文書</p> <p>〔A〕施入・出納・曝涼関係文書</p> <p>(イ) 双倉関係文書①</p> <p>(i) 勅封倉関係文書……………</p> <p>(ii) 網封倉関係文書……………</p> <p>(ロ) 双倉以外の関係文書</p> <p>(i) 北倉代関係文書②……………</p> <p>(ii) その他③……………</p> <p>〔B〕収納器物附属文書</p> <p>(イ) 丹斤量注文……………</p> <p>(ロ) その他……………</p>	<p>ナシ</p> <p>ナシ</p> <p>ナシ</p> <p>〔一〕 造東大寺司政所で反故にされた文書②</p> <p>〔二〕 中央官司で反故にされた文書(国郡未詳戸籍)②</p> <p>ナシ</p> <p>造東大寺司政所で反故にされた文書(いわゆる丹裏文書)④</p> <p>その他⑤</p>
<p>〔乙〕写経所政所におかれていた文書</p> <p>〔A〕写経所関係文書⑥</p> <p>(イ) 写経所(広義)で書かれた文書……………</p> <p>写経所の事務帳簿</p> <p>写経所関係者が写経所に提出した文書</p> <p>写経所から出した文書の案文</p> <p>写経所から出した文書だが、奥判(返抄)等を得てもどつてきた文書</p> <p>写経所にきた文書の案文</p> <p>その他⑦……………</p> <p>(ロ) 写経所にきた文書</p> <p>(i) 造東大寺司からきた文書……………</p> <p>(ii) 皇后宮職(紫微中台・坤宮官)からきた文書……………</p> <p>(iii) その他からきた文書……………</p>	<p>〔一〕 写経所政所で反故にされた文書</p> <p>(1) 〔A〕写経所関係文書のうち、表文書として残存せず、裏面を利用された文書</p> <p>(2) 造東大寺司告朔解案⑧</p> <p>〔二〕 造東大寺(金光明寺造物所)政所で反故にされた文書⑨</p> <p>〔三〕 皇后宮職で反故にされた文書⑩</p> <p>〔四〕 中央官司で反故にされた文書(戸籍等の公文)⑪</p> <p>ナシ</p> <p>造東大寺司政所で反故にされた文書⑫</p> <p>皇后宮職(紫微中台・坤宮官)で反故にされた文書⑬</p> <p>ナシ</p>
<p>〔B〕造石山寺所関係文書(石山写経所関係文書を含む)⑭</p> <p>(イ) 造石山寺所(広義)で書かれた文書……………</p> <p>造石山寺所の事務帳簿</p> <p>造石山寺所の下部機関(山作所等)・関係者が造石山寺所に提出した文書</p> <p>造石山寺所から出した文書の案文</p> <p>造石山寺所にきた文書の案文</p>	<p>〔一〕 造石山寺所で反故にされた文書</p> <p>(1) 〔B〕造石山寺所関係文書のうち表文書として残存せず裏面を利用された文書</p> <p>(2) 造東大寺司告朔解案⑧</p> <p>(3) 但波吉備麻呂計帳手実継文(神亀元年～天平十四年)⑮</p> <p>(二) 奈良から造石山寺所に持参された文書</p> <p>(1) 天平末～勝宝四年文書⑯</p> <p>(2) 越前関係文書(勝宝六年～宝字四年)⑰</p> <p>(3) 彩色関係文書(勝宝九歳～宝字二年)⑱</p> <p>(4) 写経関係文書(宝字二年)⑲</p> <p>(5) 東塔所関係文書(宝字三～四年)⑳</p> <p>(6) 法華寺阿弥陀浄土院金堂関係文書(宝字四年)㉑</p> <p>(7) その他(宝字一～五年)㉒</p> <p>ナシ</p> <p>造東大寺司政所で反故にされた文書㉓</p>

14年までの間には、すでに開元入蔵録にはない別生經（大部經典の1部を抄出したもの）・偽疑經（中国撰述の疑經と仏教以外の思想が入るなどの乱れのある偽經）・録外經（開元釈教録のどこにも載せられていないもの）も写經されていた。こうした前提があり、天平15年からは、開元釈教録では入蔵の対象外としていた別生・偽疑・録外經、さらに經律論賢聖集傳の域をこえて章疏類（注釈書類）も含めて、当時の日本に存在するすべての仏典を集大成した一切經を創ろうという方針に、再度切り替えたのである。この2度目の方針変更は開元入蔵録の放棄ではない。集めたすべての仏典を、開元入蔵録を基準として編成しようとした点が重要である。

そして、大仏造立を東大寺でおこなうことが決定した天平17年以降は、五月一日經は金光明寺（東大寺）に安置すべきものとして位置づけられた。さらに、『続日本紀』の天平感宝元年（749）閏5月癸丑条にある聖武天皇の施入詔に、「以花嚴經為本、一切大乘小乘經律論抄疏章等、必為轉読講說。悉令尽竟。遠限日月、窮未來際」とあるように、華嚴經を本とした一切經の轉読講說体制を永久におこなうための模範となる一切經としての性格が、五月一日經には与えられたのである。これにより、天平勝宝元年（749）に五月一日經は書写を一区切りさせるが、天平勝宝2年には書写を再開する。天平勝宝3年からは光明皇太后の方針に沿って、章疏の書写を重点的に進めた。そして、天平勝宝4年4月9日の大仏開眼会と、それに続く安居では、五月一日經が轉読講說のテキストとして東大寺で使用された。『続日本紀』の天平勝宝4年6月丁酉条には、新羅王子金泰廉一行が大安寺・東大寺に行き礼仏するとある。東大寺では大仏を礼拝し、その前でおこなわれている法会を目の当たりにしたのであろう。そのとき、当時最新の開元釈教録を基準に編成した一切經の存在は金泰廉等⁽¹⁵⁾にも伝えられ、その意味で五月一日經は対外政治的な役割を果たしたともいえる。

法会の後、五月一日經の經律論賢聖集傳は天平勝宝5年に東大寺に施入され、東大寺所蔵經となる。この後も章疏の書写は、天平勝宝8歳まで続けられ、聖武の死去を機に書写が打ち切られ、章疏も東大寺所蔵となった。

このように五月一日經は、天平期の国家的な仏教政策である国分寺・国分尼寺建立と大仏造立、そして両者を一体化させた東大寺建立と直結しており、大仏開眼会では、花嚴經を本とした一切經の轉読講說のテキストとして使用された。このような役割を果たしたことから、五月一日經は、当時の国家的な仏教政策の中核に位置する一切經だといえる。

さらに五月一日經の性格を見きわめるために、同時期に写經された天平6年の聖武天皇發願一切經との関係を見ておきたい。これは内裏系統の写經機構で写經されたので、写經事業の詳細を知ることにはできないが、写經開始後、五月一日經と同様、やはり開元釈教録を基準とした一切經をめざして進められた。天平期、同じ目標で2つの一切經が内裏系統と皇后宮職系統の2カ所の写經所で同時に進められたのである。初めのころは、おそらく聖武發願一切經のほうが主導的な地位にあったと思われるが、途中からこの位置づけが逆転する。聖武一切經は天平勝宝に入りまもなく終結した。前述の、天平感宝元年の聖武施入詔で打ち出された華嚴經を本とする一切經轉読講說体制の具現化のため、同時期に写經された他の一切經（先写一切經・後写一切經）と同様、東大寺以外の官大寺に施入されたのである。

そこで注目したいのが、五月一日經の写經を担当した皇后宮職系統写經機構が「勅旨写一切經所」と呼ばれた事実である。この呼称の意味は「勅旨によって認定された写一切經所」であり、他の写

経所とは一線を画すことを明確に意識した呼称である。史料上は天平18年(746)～天平勝宝4年(752)に見られる。五月一日経の写経事業上の画期でみると、あらゆる仏典の集大成として写経する方針を打ち立てた天平14年(742)から、書写打ち切りの天平勝宝8歳(756)までが、「勅旨写一切経所」の認定期間であったと推測される。そのような「勅旨写一切経所」で写経された五月一日経を、私は日本版の「勅定」一切経であると規定してみた。

そうした位置づけの根拠に、五月一日経の勘経の問題がある。すでに東大寺所蔵となっていた五月一日経の経律論賢聖集伝は、天平勝宝6年(754)から天平宝字2年(758)ごろにかけて、写経の本経とは別のテキスト(証本)と照合して校訂する勘経がおこなわれた。証本は宮中の所蔵經典である図書寮経のうちの中国将来経である。つまり中国から直接もたらされた信用度の高い經典を証本に、誤写を訂正する作業が大規模におこなわれたのである。それによって五月一日経は、質的にも權威あるテキストとなり、質量ともに最高權威を誇る「勅定」一切経となりえたのである。⁽¹⁷⁾

勘経を担当したのは紫微中台(皇后宮職)管下の嶋院写経所である。勘経の一部は4つの官大寺の僧等を大規模に動員して、校訂作業を急いだ。嶋院写経所とは、大和国分尼寺である法華寺の嶋院につくられた写経所である。したがって、これも皇后宮職系統の写経機構の1つといえる。嶋院写経所では、勘経したばかりの五月一日経をテキストに、法華寺に所蔵するための一切経の写経事業もおこなわれた。これが善光朱印経である。同様に、東大寺写経所でおこなわれた天平宝字4年(760)の光明皇太后発願一切経(光明の死により中止)や、宝字5年の光明の周忌斎に用いるための一切経も、五月一日経をテキストとして、五月一日経の目録にしたがって写経された。このように五月一日経は、一切経写経の基準目録兼書写テキストとしての役割を、この時期何度も果たしたのである。

一方、内裏系統の写経機構では、孝謙太上天皇が発願した景雲一切経の書写が、天平宝字2年(758)より開始された。これは、五月一日経以外のテキストを本経として書写したものであるが、五月一日経と同じように、あらゆる仏典の集大成をめざして進められた。天平宝字6年からは、五月一日経を証本に勘経され、最終的に写経・勘経が終わるのが神護景雲3年(769)、その後東大寺に奉納された。景雲一切経の勘経の証本に五月一日経が使われたということは、五月一日経の質の高さを物語るものである。五月一日経の質量を越えようとした第2の「勅定」一切経としての性格を景雲一切経はもっているが、一切経の編成基準と勘経証本としての五月一日経がその土台にあったからこそ成立しえたというべきであろう。

五月一日経の写経事業とは、単なる写経事業ではない。写経を通じて、国家仏教がよりどころとすべき「勅定」一切経を新たに創出する事業であった。写経所文書は、このような歴史的意義をもつ一切経を創出した写経機構の史料群として理解しなければならない。

おわりに

1980年代より、写経所文書そのものに着目した研究動向が盛り上がり、写経事業や、写経機構の解明が大幅に進んだ。⁽¹⁸⁾ 研究環境が整ったことが大きな要因であり、正倉院文書研究会という専門の学会もつくられた。その研究の盛り上がりは、早くから研究対象とされた公文類や石山寺関係文書にもおよび、また写経の本質である仏教研究にも波及している。最近、国語学研究者による解

読と研究が急速に進み、難解だった古代文書のかかなり詳細な解釈と読解ができるようになってきた。これらをふまえ、今後の正倉院文書研究は学際的な共同研究の進展も期待され、多彩なテーマでの日本古代の史実が発掘され、より深化していくだろう。

註

- (1)——正倉院文書の基本構成については、次の文献を参照。『週刊朝日百科 皇室の名宝 05 正倉院 文書と経巻』朝日新聞社、1999年。杉本一樹『日本の美術 440 正倉院の古文書』至文堂、2003年。
- (2)——以下、皇后宮職系統の写経所については、拙著『正倉院文書と写経所の研究』（吉川弘文館、1999年）を参照。
- (3)——栄原永遠男「藤原光明子と大般若経書写—『写経料紙帳』について—」（初出1991年、栄原永遠男『奈良時代の写経と内裏』塙書房、2000年）。
- (4)——五月一日経については、皆川完一「光明皇后願経五月一日経の書写について」（初出1962年、皆川『正倉院文書と古代中世史料の研究』吉川弘文館、2012年）、註(2)拙著を参照。
- (5)——皆川氏は約7000巻とするが、私はもう少し少ない6500巻ぐらいと推定した。
- (6)——間写については、藺田香融「南都仏教における救済の論理（序説）—間写経の研究—」（『日本宗教史研究 4 救済とその論理』1974年）で示された一覧表と、それを写経所文書の全時期にまで広げて網羅しようとした「SOMODA」（大阪市立大学正倉院文書データベース）を参照。
- (7)——五部一切経については、栄原永遠男「奉写一切経の写経事業」（初出1977年、栄原『奈良時代写経史研究』塙書房、2003年）参照。
- (8)——内裏系統写経機構については、註(3)栄原著書を参照。
- (9)——写経所の案主や別当については、註(2)拙著参照。

- (10)——拙著でも述べたが、註(1)杉本著書にわかりやすい解説がある。
- (11)——栗原治夫「奈良朝写経の製作手順」（坂本太郎博士古稀記念会編『続日本古代史論集 中』吉川弘文館1972年）。
- (12)——造石山寺所文書については、岡藤良敬『日本古代造営史料の復原研究』（法政大学出版局、1985年）と岡藤氏作成の「造石山寺所関係文書・史料篇」（『福岡大学総合研究所報』100別冊、1987年）を参照。
- (13)——吉田孝「律令時代の交易」（初出1965年、吉田『律令国家と古代の社会』岩波書店、1983年）。
- (14)——この項については、註(2)拙著および拙稿「五月一日経『創出』の史的意義」（『正倉院文書研究』6、1999年）参照。
- (15)——華嚴経を本とする一切経転読講説体制については、中林隆之『日本古代国家の仏教編成』（塙書房、2007年）参照。
- (16)——五月一日経の対外的役割については、拙稿「日本古代国家における一切経と対外意識」（『歴史評論』586、1999年）に詳述した。
- (17)——勘経については、拙稿「嶋院における勘経と写経—国家的写経機構の再把握—」（『正倉院文書研究』7、2001年）参照。
- (18)——正倉院文書研究の新動向については、本報告書の拙稿「写経所文書研究の展開と課題」を参照。

【付記】この研究ノートは、2011年11月4日に韓国中央博物館で行われた「正倉院文書の世界」と題する講演会で発表した原稿をもとに整理・補訂したものです。

（学識経験者、人間文化研究機構連携研究員）
（2014年1月7日受付、2014年5月26日審査終了）